

[国 語]

お話づくりを通した文学的文章の読み方指導に関する考察

－物語を楽しむための挿絵を活用したお話作りの実践から－

上原 絵里*

1 研究の目的

小学生が文学教材を読み進めていく上で、挿絵の存在は学年が低いほど読解に大きな影響を与える。文章と挿絵が一体となって物語を読み進めているようにさえ見える。挿絵は、物語の構成（冒頭・発端・山場・クライマックス・終末）や人物設定、場の設定、時の設定など物語の構成要素を把握する上でも重要な役割を果たしている。逆に言うならば挿絵から文章を想像していくことも可能であると考えられる。

そこで、本研究では文章表現をより味わうための方策として、挿絵を用いて物語をリライト（rewrite）し交流する活動を通して、登場人物の行動、行動から想像される心情、文章表現などの読みの変容について検証していくこととする。

2 研究の内容

(1) お話作り（リライト）が支える個々の読み

リライトとは「すでに存在する文章を、ある目的などに従って、書き改めること」である。例としては、要約やあらすじを書く、物語の続きを書く、視点人物を替えて書くなどがある。本研究では、物語の文章に出会う前に挿絵を手掛かりにして、人物の行動から心情を想像して創作文を書くことである。児童の学習課題としては「お話作り」と位置づける。

お話作り（リライト）を取り入れた理由は、児童によって描かれた物語は書き手である児童の「読み」が表現されたものであると考えるからである。「学習者にとって選ばれた語り手が何を想起するか、何を語るかは学習者の意図に委ねられ、学習者の「読み」に支えられたものとなる。想起され、語られた物語世界は、学習者自身の「読み」が反映され、物語という形で創造的にかつ具体的に表現されたものに他ならない。」¹⁾と述べられているように、お話作り（リライト）は児童の認識、読みを文字化することとなると考える。また、お話作り（リライト）の効果として、第1に文章を再構成するために、もとの文章や友だちの文章を的確に読む力が身につくこと、第2に再構成によって、効果的な展開の仕方や表現の仕方に気づくことができることが挙げられる。

対象は小学校2年生であり、お話作り（リライト）は初めての活動である。先行実践（1学期）には、簡単に取り組める教材から始めて、本実践（2学期）につなげていった。基本的なやり方は最後まで同じ内容を通して、習熟が図られるように配慮した。児童に示したやり方の内容は下記の通りである。

〈お話作り〉

- 1 ふせんにことばを書いてはる。
- 2 ようすや気もちが分かるように文を書く。
- 3 ペア学しゅうで読み合う。
(メモする)
- 4 せい書する。

物語の構成に沿った挿絵を使っていくので、挿絵ごとにお話作り（リライト）をして交流をする。交流の中で、自分の書いた表現よりも友だちの表現の方が合っているのではないかと思った場合には、その表現を付箋にメモしてもらふことができる。最終的に清書用紙に清書をするときに、再度読み返して自分の考えた表現でいくか交流の中で集めた表現に替えるのかは、学習者に任せられる。下書きと清書を比べることで、学習者の読みが交流によって変容したかどうかを見取っていく。

* 上越市立安塚小学校

(2) 読みの観点と挿絵の活用

「ある作品に出会ったとき、作品の全体像を自分なりに把握し、表現する手段を身につけたとき、子どもたちは自力で作品を詳しく読み始める。そこに教師の「場面分けをしましょう。」「あらすじをまとめましょう。」等というきまり切った発問は不要になる。」²⁾と二瓶弘行氏は述べ、「自力読みの観点25」³⁾としてまとめている。主観的な自分の読みを支える根拠としての表現構造に着目した読み（二瓶氏のいう客観的な読み）として子どもに身につけさせたい読み方である。

本実践では、自力読みを身につけさせることが目的ではないので、お話作り（リライト）をしながら、2年生として最低限押さえておきたい観点が身につくように配慮した。設定した観点は、次の通りである。

○2年生で押さえておきたい観点

1 作品構造に関する観点

- ①冒頭（作品のはじまり） ②発端（事件の始まり） ③山場の始まり（事件の重要な部分の始まり）
④クライマックス（事件がもっとも盛り上がる場所） ⑤終末（事件の終わり） ⑥終わり（物語の終わり）

2 設定に関する観点

- ①人物設定（中心人物、登場人物） ②時の設定、場の設定

3 視点に関する観点

- ①話者

お話作り（リライト）に活用した物語の挿絵は、作品構造に関する観点到沿って①冒頭、②発端、③山場の始まり④クライマックス、⑤終末、⑥終わりが分かるように選び、枚数も必要最低限になるように選んだ。

冒頭の場面であれば、時・場・登場人物の設定が文章表現として入ることが必要であるように、それぞれの場面でのような文章表現が必要とされるのかを考えながら書こうとしているか検証していく。

(3) 交流を通じた読みの変容

文学教育の目標として松本修氏は「文学の読みとその交流において、意味づける行為・伝える行為のいずれの側面においても言語化の能力が重要であり、かつまたその能力を文学の読みとその交流が保障するものである」とし「文学を読むこと、その読みを交流すること、この二つの活動を推進することそのものが、文学教育の目標である。」⁴⁾としている。本実践では、自分の書いた文章を友だちと交流することで、どの文章が説得力のあるリライトであるかを吟味していく。本実践での交流活動は、ペア学習を基本として、話し合いの流れも基本的なやり方を示し、最後まで同じ内容を通して、習熟が図られるように配慮した。話し合いの流れは次の通りである。

〈ペア学習〉

- 1 Aさんが音読する。(二人で文を見ながら聞く。)

うんうん、ほくとおなじだね。

- 2 いいところ、おもしろいところを伝える。

どうしてこうなったの？

- 3 なおしたほうがいいところを教える。

「 」をつけようね。行をかえたほうがいいね。

- 4 Bさんにこうたいする。

- 5 メモを書いてはる。

この文章いいね。メモさせてね。

聞き方の基本として、肯定的に受け止めること、疑問に思ったことは理由を聞くことを指導し、明るい雰囲気での話し合いが進められるように相手の文章を否定するような言動は取らないことを約束する。また、文章表記がしっかり身につけていない面も見られ、互いにチェックする場面も設けた。ペアを替えて数回行う。

5 研究の成果と課題

(1) お話作り（リライト）が支える個の読みについて

学習指導要領低学年の「読むこと」では、「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」であり、「書くこと」では、「想像したことなどを文章に書くこと」である。ちなみに、お話づくりの活動は、中学年に「身近なこと、想像したことなどを基に、詩を作ったり、物語を書いたりすること」となっており、登場人物や場面を設定してお話づくりをする活動は、2年生の言語活動としてはハードルが高いと言える。

主教材の『お手紙』を学習した後、同じ登場人物で場面を変えてお話づくりをするという実践がよく見られるが、個々の読みを確かなものにする、自分の表現にこだわるという点においてはお話づくり（リライト）は有効な手立てとなっていた。本実践を通して、低学年にとっては「挿絵を読みリライトしていく言語活動」＝「登場人物の行動を中心に想像を広げながら読む」につながっていく可能性があると感じている。

(2) 読みの観点と挿絵の活用の効果について

授業で挿絵を活用する場合、原作の挿絵をすべて使うことはあまり有効とは言えない。作品構造に関する観点に沿って①冒頭②発端③山場の始まり④クライマックス⑤終末⑥終わり、というように必要最低限に絞って提示することが有効である。そのような物語の作品構造を知った上でリライトしていく段階では、冒頭（作品のはじまり）には場の設定、時の設定がなければ読者には理解してもらえない、クライマックスのところでは盛り上がるような文章にしていこうと求められる、というように書くことで初めて身に付く読みの観点もあるということに子どもたちは気付いてきた。

(3) 交流を通じた読みの変容について

本実践での交流活動は、ペア学習を基本として、話合いの流れも基本的なやり方を示し習熟が図られるように配慮してきた。相手の話を肯定的に受け止めることを聞き方の基本として、温かい雰囲気では話合いを進められるように進めてきた。先行実践の段階では、交流開始の時間までに自分の文章を書き終えることができず、友だちの文章を参考にして書き進める子もいたが、本実践に入る頃には、「自分なりに書いた文章が納得いかない。だから、この部分について友だちの意見がほしい。」というように、ペア学習での交流に積極的に目標を持つ子どもたちが出てきた。このことは、文章や言葉に対するこだわりが出てきたことととらえられる。

また、前出の「人物の行動から心情を読む（かえるくんの場合）」のように、ペア学習で見つけられた表現のパターンを学級全体で話し合うこともできた。この場合、3パターンのうちどれが一番良いよということではなく、人物像にせまるためにどのような読み方ができるのかということを強調した。実物の作品の表現を正解とするのではなく、よりかえるくんらしさを追求することができたかということを指導した。

(4) 今後の課題

挿絵と読みの観点の指導をリライトという手法で合体させ、低学年児童によりたのしい物語教材の指導を行いたいということから出発した実践だったが、様々な課題も見えてきた。最後に本実践を通しての課題を記しておく。

第一に、この実践は小学校2年生での実践であるが、3年生の教材には「物語を書こう」という単元があり、作品構造や人物設定・時・場の設定をして物語を書いていく。2年生で学んだリライトの手法が、次の学年ではどのように生かすことができるのか、どのようにつないでいくことができるのか、学年を追った指導の在り方を考える必要を感じる。

第二に、「どのような意見を言っても肯定的にとらえてくれる。うなずきながら聞いてくれる。」という安心感が言語活動を有意義な活動にする。互いの思いや表現を受け止めていくための言語活動の礎となる「聞く・話す・話し合う」スキルがしっかりと身につけていることが要求される。

今後どのような教材で子どもたちの読みを引き出すことができるか、どのような指導過程を組むことで楽しい読みの授業を構想できるか、今回の授業をもとに挑戦していきたい。

引用文献

- 1) 丸山義則 上越教育大学学校教育実践研究センター教育実践研究第23集 p.55 「読みの交流の起点としてのリライト」
- 2) 二瓶弘行 『子供が創り、子どもが学ぶ』 公文書院 1999年 p.81
- 3) 二瓶弘行 『文学作品の「客観的な読み」と「討論の授業」』 『教育科学 国語教育』 2006年 9月号
- 4) 松本 修 『文学の読みと交流のナラトロジー』 東洋館出版 2006年 p.19